

1493

世界を変えた
大陸間の「交換」

1493: Uncovering the New World Columbus Created
by Charles C. Mann

Copyright © 2011 by Charles C. Mann
Japanese translation published by arrangement with
Charles C. Mann c/o Taryn Fagerness Agency, LLC.
through The English Agency (Japan) Ltd.

Book Design	山内迦津子 + 林 聖子 (山内浩史デザイン室)
本文 DTP	後田泰輔 (desmo)
Cover Illustration	Roberto A Sanchez / ゲッティイメーجز

わたしの家を作り
わたしの家となった女性に

—
C
C
M



1493

世界を変えた大陸間の「交換」

目次

はじめに

均質新世の到来

まえがき

13

ふたつの記念碑

第1章

パンゲアの裂け目

29

灯台へ

44

船に積まれた銀

55

運の裏返し

66

第1部

大西洋の旅

87

「下等な構造を持つ生物」

89

タバコ海岸

第2章

奇妙な土地

93

リスクの共有

106

「イングランドバエ」

128

「計り知れない富」

146



第2部

大平洋の旅

225

通貨を満載した船

(絹と銀の交換 その1)

第4章

「あと一步の努力」

227

「商人は海賊で、海賊は商人だった」

232

金がない

244

「世界の宝」

253

「たつぷり小舟一艘分の木の鼻」

269

魔法の山

281

悪い空気

第3章

「収奪専用国」

151

順応

157

一八〇度の転換

173

「伝染病も致死性疾患もない」

184

マラリアを寄せつけない屋敷

192

イエロージャック

203

戦争と蚊

215

Das mit vom Genoss zu der Zeit
 an die Dörfer auf der Erde,
 haben auch am Hand jeder fonderm
 hindern dar mit er vom hat der
 widerstreich Entpfacht haben
 auch so die Ladem Gent
 schick an



第3部

世界の中のヨーロッパ

339

相思草、番薯、玉米（絹と銀の交換 その2）

密航者

292

マルサス主義者の懸念

313

「山の岩肌が露出する」

318

大寨に学ばず

329

農工複合体

第6章

ジャガイモ戦争

341

遣伝子の海

345

グアノの時代

367

まさに近代的な飢饉

380

不精者の苗床

391

「甲虫をめぐる戦争」

398

第5章



第4部

世界の中のアフリカ

477

「シャンパン風呂に浸かる女」

428

ウィツカムのしたこと

450

世界の終わり

471

黒い金

第7章

鳥も虫もない

410

「油の化学」

413

具だくさんのスープ

第8章

美男子ジョニー

479

幸先の悪い出発

493

新世界の誕生

509

家族の価値

525

騒乱の都市

547



逃亡者の森

第9章

カラバルにて

560

囚われたアフリカ人

565

地峡にて

588

「降伏文書」

606

それゆけ、牛！

628

ドナ・ロサリオの農園から見た眺め

641

結び

命の流れ

649

ブララカオにて

第10章

思考停止

651

斜面の階段

654

船の上で

663



付記 B	付記 A
グローバリゼーションのあけぼの	用語との闘い
683	675

謝辞
689

参考文獻
751

原注
797

索引
811

- ・本文中の「」は訳者による注を示す。
- ・※(あるいは+)は傍注があることを、
- 「」内の数字は巻末に注があることを示す。
- ・本文中の書名については、
邦題のないもののみ、初出時に原題を併記した。

まえがき

ほかの著書と同様、本書も庭からはじまった。二〇年近く前のこと、地元の大学生たちが一〇〇品種ものトマトを栽培したという告知を偶然、新聞で目にした。見学を希望すればその成果を見せてくれるという。わたしはトマトが好きなので、当時八歳だった息子を連れて訪ねてみることにした。そして大学の温室に入ったとたん、仰天した。見たこともない多種多様な大きさや形や色のトマトがずらりと並んでいたからだ。

ある学生がプラスチック皿に載せたサンプルをすすめてくれた。その中に、異様なまでにごぼこのトマトがあった。古い煉瓦のような色をしていて、へたのまわりのかんりの範囲に黒っぽい緑色が広がっている。わたしはときたま夢の中で何か強い感覚をおぼえて目を覚ますことがあるが、そのトマトもまさにそんな感じだった。わたしの口に衝撃を与え、一瞬にして目覚めさせてしまった。学生がそのトマトの名はブラック・フロム・トゥーラ (Black from Tula) というのだと教えてくれた。一九世紀にウクライナで開発されたのちアメリカに持ち込まれ、そのまま品種改良されることなく栽培されてきた^エ先祖伝来の^ムトマトだという。

「トマトはメキシコ原産だと思っていましたよ」わたしは驚いてそう言った。「いったいどうしてそれがウクライナで栽培されているんですか」

その学生から、トマトとトウガラシと豆 (サヤインゲンではなくインゲンマメ) のエアルーム品

種の種子のカタログをもらい、帰宅後、そのページを繰ってみた。これら三つの野菜はいずれもアメリカ大陸原産だ。だがカタログに掲載されている品種の中には、日本のトマトやイタリあのトウガラシ、コンゴの豆など、海の内こうからやってきたものもたくさん混じっていた。わたしはあの奇妙だがおいしいトマトをもっと食べてみたくなり、種子を注文してプラスチックのプランターで発芽させ、苗を庭に植えた。それまで一度もやってみたことがなかったのに。

温室を訪れてからほどなく、わたしは図書館へ行った。そしてあの学生にぶつけた質問が的外れだったことを知った。まずトマトの原産地は、おそらくメキシコではなくアンデス山脈北部であったらしい。ペルーとエクアドルにはいまも五、六種の野生のトマトが存在し、画鋲ほどの大きさの実をつけているが、一種をのぞいてどれも食用には適さない。また、植物学者にとって真の謎は、トマトがどのようにしてウクライナや日本に伝わったかということではなく、今日のトマトの祖先がどのようにして南米からメキシコへ渡ったかということだ。そこでは現地の栽培者が徹底的な品種改良を進め、トマトをより大きく、より赤く、そして何より重要なことに、より食用に適した野菜に変えたのである。なぜ役に立たないトマトを何千キロメートルも離れたところへ運んでいったのか。なぜこうした種を本来の生育地で環境に適應させなかつたのか。なぜメキシコの人々はこの植物を自分たちのニーズに合うよう改良しようと思ひ立つたのだろう。

これらの疑問は、長らくわたしが関心を寄せてきたテーマである、アメリカ大陸の最初の住民とも深いかわりがある。「サイエンス」誌ニュース部門の記者として、わたしはたびたび考古学者や人類学者、地理学者に話を聞き、彼らが太古の先住民社会の規模や文明の高さを次第に再認識するようになったことを知っていた。首をひねりつつもインディオ（インディオ／インディ

アンという呼称をあえて使うことにした経緯については、巻末の付記A六八一頁を参照)の栽培者に尊敬の念を抱く植物学者たちも、まったく同じ思いを抱いていたのだ。わたしは彼らとの対話から十分に知識を得て、ついには現代の研究者たちが先コロンブス期アメリカ大陸の歴史をどう見ているかを一冊の本〔拙訳『1491』NHK出版〕にまとめることができた。わたしが庭に植えたトマトのDNAにも、そうした歴史が少しばかり組み込まれているのだ。

そしてもちろん、コロンブス以後の歴史も組み込まれている。一六世紀以降、ヨーロッパ人は世界中いたるところへトマトを運んでいった。この奇妙な果実が無害であることがはつきりすると、西はアフリカから東はアジアまで、ありとあらゆる地域の農民たちがこぞって栽培に着手した。この植物は行く先々でささやかながらも文化に変化をもたらした。ときには影響が小さくなくなった地域もある。たとえば、トマトソースのない南イタリヤなど、誰も考えられないだろう。

それでもまだわたしは、このような生物の“移植”が食卓以外の場でもなんらかの役割を演じた可能性には思いいたらなかった。それに気づかせてくれたのは、古書店で偶然目にした一冊のペーパーバックだった。当時テキサス大学に籍を置いていた地理学者にして歴史学者、アルフレッド・W・クロスビーの著作、『生態系帝国主義』だ〔岩波書店刊の邦題は『ヨーロッパ帝国主義の謎』だが、文脈に合わせるため、ここでは原題 *Ecological Imperialism* に近い訳をつけた〕。このタイトルはどういう意味だろうと思ひ、わたしは本を手にとった。最初の文がページから飛び出してきた。「ヨーロッパ人移民とその子孫はありとあらゆる場所にいる。これには説明が必要だ」

クロスビーが言わんとしていることは完璧に理解できた。ほとんどのアフリカ人はアフリカに、ほとんどのアジア人はアジアに、そしてほとんどのアメリカ大陸先住民はアメリカ大陸に住んで

いる。だがヨーロッパ人の場合は、膨大な人数の子孫がオーストラリアや南北アメリカ大陸、アフリカ南部でも暮らしている。移住に成功し、彼らがこうした地域の多くで多数派となっていることは明白な事実だ。しかしわたしはそれについて深く考えたことはなかった。だがそのとき、はじめて思った。なぜだ？ 生態学的に見れば、これはウクライナのトマトと同じくらい不思議な現象ではないか、と。

クロスビー（と、その同僚たち数名）がこの問題について研究しはじめるまでは、歴史学者はヨーロッパが地球を席巻した要因を、ヨーロッパの社会的あるいは科学的な優越性からのみ考察する傾向にあった。クロスビーは『生態系帝国主義』で別の解釈を提案した。確かにヨーロッパはしばしば、敵よりも訓練の行き届いた軍隊と進歩的な兵器を持っていたが、長い目で見れば、決定的な利点はテクノロジーではなく、生物学的な要因だったと考えたのである。大西洋を渡った船は、人間だけではなく——あるときは意図的に、あるときは偶然に——植物や動物も運んでいった。コロンブスの大陸到達後は、何十億年もの昔からたがい離れていた生態系が突如として出会い、入り混じることになった。クロスビーはこの過程を「コロンブス交換」と名づけ、前の著作のタイトル「一九七二年刊行の *The Columbian Exchange*」としていた。こうした交換によって、トウモロコシがアフリカに、サツマイモが東アジアに、馬とリンゴがアメリカ大陸に、そしてルバーストとユーカリノキがヨーロッパへと伝えられた。また、昆虫や草やバクテリア、ウイルスなど、あまり知られていない有機体の交換もおこなわれた。コロンブス交換は、その参加者によって完璧にコントロールされていたわけでも理解されていたわけでもなく、ヨーロッパ人がアメリカ大陸とアジアのかんりの部分を、そしてアフリカの一部を、ヨーロッパ風の生態系へと——つまり、

現地住民より異邦人である彼らのほうが心地よく利用できる景観へと――変容させることを許した。クロスビーは、このような生態系帝国主義により、イギリスやフランス、オランダ、ポルトガル、スペインが、植民地獲得を可能にしうる恒常的な力を獲得したのだとしている。

クロスビーの著作群は、環境史学という新しい学術分野を構成する。同時期に大西洋学という別のジャンルも脚光を浴びるようになった。こちらは、大西洋沿岸同士の文化交流、つまり、知的、文化的、経済的交換の重要性に力点を置いている（近年は、多くの大西洋学者が太平洋地域の動きも視野に入れるようになったので、分野の名称を変えるべきかもしれない）。こうしたあらゆる分野の学者が研究を重ねた結果、世界中に広がり相互に影響し合う文明、「グローバリゼーション」という語でイメーじされる世界の起源が新たな観点から描き出されるようになった。われわれが学校で習った王や女王の歴史の中で、生態系や経済において交換が果たした驚くべき役割にも目が向けられることになったのだ。そして、コロンブスの航海は新世界を発見したのではなく、創出したのだという認識も高まった。その新しい世界がいかにして創られたか、というのが本書のテーマである。

このような研究は最新の科学ツールに大きく助けられてきた。人工衛星は、天然ゴムの主成分であるラテックスの、実態がよくわかっていない大量取引による生態系の変化を精密に地図に示してくれる。遺伝学者たちはDNAの分析により、ジャガイモ疫病が破壊的に感染していった経路を突きとめる。また、生態学者は数学的な手法で、ヨーロッパにマラリアが広がった過程をシミュレートする。例はほかにもいくらでもある。政治的な変化にも助けられた。なかでも本書にとってとりわけ重要だったのは、一九八〇年代はじめにクロスビーが生態系帝国主義の研究をし

ていたころより、中国での調査が容易になったことだ。今日では、関係諸機関で猜疑の目を向けられることはあまりない。わたしが北京で経験したおもな障害は、劣悪な交通事情だけだった。図書館員も研究者も、古文書の原本をデジタルスキャンしたデータを快く見せてくれ、わたしがシャツのポケットに入れて持ってきた小さなメモリースティックにコピーさせてくれた。

こうした研究は、コロンブスの大陸到着後に起きた変化を新たな観点から描き出した。それは、大西洋をはさむふたつの——ユーラシアとアフリカを切り離して考えるなら三つの——古い世界がぶつかり合い、そこからひとつの新しい世界が誕生した、ということだ。一六世紀に活況を呈していたアジア通商圏への参入を望んだヨーロッパは、経済的動機から交換を進め、一九世紀ごろには、これによって地球を単一の生態系ゾーンへと変容させたのである。生物学的な見地からすればあつというまのことだっただろう。こうした生態系ゾーンの創出により、ヨーロッパは決定的な数世紀のあいだ、政治的主導権を握ることができ、今日、世界に広がる経済システムの輪郭を形づくることができた。このシステムはほとんど意識されないほどみごとに絡み合い、いたるところで機能している。

一九九九年、シアトルで世界貿易機関のある会議が開かれた際に、抗議行動の嵐が吹き荒れ、グローバリゼーションという概念が世界の注目を集めることとなった。それ以来、ありとあらゆるイデオロギー陣営の識者が論文や書籍や白書、ブログ、ビデオ・ドキュメンタリーを通じて、公の場でグローバリゼーションの解説、賞讃、攻撃を試みてきた。当初から議論はまっぴらつに分かれていた。一方の陣営を構えるのは、自由貿易こそが社会を豊かにすると熱心に説く経済学者や起業家たちだ。彼らは、規制のない交換をおこなえば、双方の当事者が利益を得られると言い、

貿易をすればするほどよいのだと主張する。それがわずかでも損なわれれば、われわれは、人智が実らせた果実をほかの地域から手に入れる機会を奪われてしまうのだという。彼らの対極には、かまびすしい環境保護活動家や文化ナシヨナリスト、労働組合の幹部や反企業活動家がいて、規制なき貿易は、想定外の破壊的な形で政治、社会、環境保全の仕組みをひっくり返すと非難する。貿易はしなければいけないのだと主張し、欲深い国々の粗暴な力から、各地のコミュニティを守れと訴える。

対立するこれらふたつの見解にはさまれて、地球規模のネットワークは激しい知的論争の的となった。この闘いの場では、相反するデータを示す表やグラフや統計値が引っぱり出された。政治家たちが機動隊の作る壁の背後で会見して国際貿易協定を強引に結ぼうとするようなところは、催涙ガスや投石のおまけもつく。スローガンとそれに対抗するスローガン、事実と、もつともらしく伝えられる虚偽の情報が交錯し、一見、収拾がつかないようにも見えるが、わたしは多くを知るにつれ、いずれの主張も正しいのではないかと思うようになった。そもそもグローバルゼーションとは、最初から、莫大な経済利益と同時に、その利益が相殺されかねない環境上、社会上の混乱をもたらすものだったのである。

確かに、われわれの時代は過去とはちがう。わたしたちの祖先はインターネットも飛行機も、遣伝子組み換え作物も持っていなかったし、海外の株式をオンラインで売買することもできなかった。けれども、さまざまな記録を読んで世界市場が形成されてきた経緯をたどってみると、現在テレビのニュース番組で伝えられるのと同じような論争が——ときには無言の声として、ときには破鐘われがねのような声となり——聞こえてくる。四〇〇年も前のできごとが、今日わたしたちが

経験している事柄の原型であったことがわかるのだ。

本書の目的は、一部の歴史学者が「世界システム」と重々しく、そして正確に呼ぶものの経済学的・生態学的ルーツを系統立てて明らかにすることではない。まったく取り上げない地域もあるし、ほとんど言及しない重要なできごともある。なぜなら、どのような形であれ、一冊の本にまとめるにはテーマがあまりに大きすぎるからだ。完璧に見せかけようとしただけでも、途方もなく分厚い読みづらい本になってしまうだろう。本書では、研究者がこの新しいイメージを描くにいたるまでの道のりを逐一なぞりはしないが、こうした知的な取り組みにおける主要な転換点については詳述したいと思う。わたしがとくに重要だと思った地域、とくに記録がしっかり残っている地域、そして——ここでジャーナリストの独断と偏見が顔を出すのだが——とくにおもしろいと感じた地域を集中的に取り上げる。もっと多くを知りたいとお思ひのかたは、巻末の原注と文献リストに記載した資料にあたっただきたい。

本書は、序章の役目を果たす第1章のあとが四部構成になっている。最初の二部では、コロンプス交換を成り立たせたふたつの要素、別々でありながらじつは関連していた大西洋經由、太平洋經由の交換を取り上げる。大西洋の部は、イングランド人がアメリカ大陸に建設した初の永続的な入植地、ジェームズタウンの例で幕を開ける〔イングランドという名称についても巻末の付記Aを参照のこと〕。この町は、純粹に経済を目的とするベンチャー事業として作られたのだが、その運命を決したのは、生態系に影響をおよぼす力、とりわけタバコの導入だった。アマゾン下流域原産のこのエキゾチックな——刺激的で習慣になりやすく、どことなく怪しげな——植物は、

史上はじめて、真の意味で世界的なブームを巻き起こした（長年ヨーロッパとアジアで愛されてきた磁器もやがてアメリカ大陸に広まり、次のヒット商品となった）。この章を土台とし、次の章では、ほかのどこよりもポルティモアからブエノスアイレスにかけての地域社会を一変させた外来種、マラリアと黄熱病を発症させる微生物について述べる。ヴァージニアの奴隷制からギアナ地方の貧困まで、この生物がさまざまな問題に与えた広範な影響を検証したあと、アメリカ合衆国の形成にマラリアが果たした役割を概観して章を閉じる。

第2部では、太平洋へと焦点を移す。スペイン領アメリカから中国へ大量の銀が運ばれたのを契機として、この地域でグローバル化の時代が幕をあげたのだ。まずは都市の歴史を紹介する。現在はボリビアにあるポトシ、フィリピンのマニラ、そして中国南東部の月港（グヰン）を取り上げる。かつては広く名を知られていたが、いまはあまり顧みられることのないこれらの都市では、世界をつなぐ主要中継点として経済交換が活発におこなわれた。そうした交換によってサツマイモとトウモロコシが中国に伝わり、中国の生態系に破壊的な影響をもたらした。典型的なループサイクルによく見られるように、こうした生態系の変容がのちの政治経済の様態を形づくることとなる。最終的には、サツマイモとトウモロコシが中国最後の王朝の盛衰に主要な役どころを演じた。そのあとに登場した共産主義王朝でも、小さいがやはり同様にあいまいな役割を果たすことになった。

第3部では、コロンブス交換がふたつの革命におよぼした影響について考察する。ひとつめは一七世紀末にはじまった農業革命、もうひとつは、一九世紀はじめから半ばにかけて進みだした産業革命だ。ここではふたつの伝来種（アンデスからヨーロッパに持ち込まれた）ジャガイモと（ブ

ラジルから南アジアや東南アジアにひそかに移植された) ゴムノキに焦点を絞る。農業革命も産業革命も、西洋の台頭と支配勢力としての勃興を支えた。いずれの革命もコロンプス交換がなければ、大きく異なるコースをとったにちがいない。

第4部では、第1部から選んだテーマを取り上げる。ここでは、人類にとって何よりも重要な交換、奴隷貿易に目を向ける。一七〇〇年ごろまでは、大西洋を渡った人々のうち約九〇パーセントがアフリカ人捕虜だった(残りの一〇パーセントはアメリカ大陸先住民が占める。これについても説明する)。人口学的に見れば、この大規模な人の移動により、アメリカ大陸の景観の多くが三世紀にわたり、アフリカ人と先住民と両者の混血者に支配されることになった。長らくヨーロッパ人の目に触れなかった彼らの関係は、いま明らかになるうとしている人間遺産の重要な一面なのだ。

このいわゆる「赤と黒」(赤はアメリカ大陸先住民の肌の色を指す)の遭遇は、ほかの出会いを背景として実現した。コロンプスに触発され、あまりにおおぜいの多種多様な人々がわれもわれもと移住していった結果、現代ではめずらしくない、世界を内包する多言語使用の巨大都市が史上はじめて出現した。メキシコシティである。この地では、上は現地貴族の女性を妻にしたコンキスタドールから、下は中国移民の同業者が安い料金で客をとると言って嘆くスペイン人理髪師まで、ありとあらゆる社会階層に、寄せ集めの文化が広がっていった。世界の十字路とも言うべきこの混乱に満ちた巨大都市は、本書の第1部で述べるふたつのネットワークの統合を象徴している。現代に視点を据える最終章では、こうした交換がなおも続いていくことを示唆する。

英雄的な航海士や才知あふれる発明家の話、すぐれたテクノロジーや制度によって帝国を獲得

した話を聞いて育ったわたしのような者にとつては、生態系と経済がコスモポリタンな場所を出現させたとする新たな過去のイメージは、いくつかの点で非常に衝撃的だ。グローバリゼーションがほぼ五〇〇年をかけて世界を豊かにしてきたことに気づき、少々不思議な気もする。また、それだけの歳月をかけてグローバリゼーションが生態系をかき乱し、多くの苦しみや政治的混乱を引き起こしたことを思うと動揺もする。しかしこうした過去のイメージにはすばらしいところもあると思う。どの地域も人間の物語の中でなんらかの役割を果たしたことを思い起こさせてくれるし、どんな事象もすべて、地球上の生物には想像もつかない複雑で大きな進歩に組み込まれていることを再認識させてくれるからだ。

わたしはいま、八月の暑い日にこの原稿を書いている。きのう、わたしたち家族はうちの庭——二〇年前、あの大学を訪れたあとにトマトを植えてから幾世代かを経ていくらか改善した畑——で最初のトマトを収穫した。

あのときカタログで選んだ種を播^まいてからほどなく、わたしはなぜ多くの人が庭いじりを楽しみたがるのか、そのわけを理解した。トマトの世話をしているうち、子供のころに戻って要塞を作っているような気がしてきたからだ。わたしは世界からの逃げ場を作っていると同時に、その世界でただひとつ、自分だけの居場所を作っていた。土にまみれて膝をつき、わたしは小さな景觀をこしらえていた。そこには、家^{ホーム}といった言葉が呼びさますような、心地のよい、時の流れから解放されたような心慰む感覚があった。

こんなことは、生物学者にとつてはたわごとにすぎないだろう。わたしのトマト畑では時季に

より、バジルやナスやピーマン、ケール、フダンソウ、いろいろな種類のレタスやレタスに似た葉物野菜を育ててきたし、近所の人に虫除けになると教わり（科学者は太鼓判を捺してくれないが）マリーゴールドも少し植えていた。これらの種の原産地は、いずれもわたしの庭から一〇〇〇キロメートル以上も離れた地域だ。近くの農場で栽培されているトウモロコシもタバコも遠隔地から伝わった。トウモロコシはメキシコ、タバコはアマゾン原産である（少なくとも、この品種のタバコはそうだ。北米原産の種もあったが、いまでは絶滅している）。それを言うなら、隣人の飼っている牛や馬や猫も外国からやってきた。わたしのような者が庭をなつかしいと思ったり、そこにいるだけで時間の觀念から解放されたように感じたりするのは、人間が適応力を（もう少し控えめに言うなら、何も知らなくても作業できる能力を）持っている証拠だ。わたしの庭は、安定と伝統の中心というより、過去の人類がさまよい、交換を繰り返してきたことを示す生物学的な記録なのである。

しかし別の意味で、わたしの感覚はまちがっていない。七〇年ほど前、キューバの民俗学者、フェルナンド・オルティス・フェルナンデスは、ある集団から別の集団に、歌や食べ物や理念など、何かが伝わったときに起きる現象を指す語として、「トランスクルトゥラシオン（transculturation）」〔文化の相互獲得を通して新しい現象が生まれる変容過程〕という不格好だが有用な言葉を考案した。オルティスは、新たに伝播したものがほぼ必ず変容を遂げることに気づいたので。人々は自分たちのニーズや状況に合うよう手を加え、皮をむいたりねじ曲げたりして、わがものとする。コロンプス以来、世界は激しいトランスクルトゥラシオンに翻弄されてきた。おそらく南極大陸の一部をのぞき、地球上のありとあらゆる場所が、一四九二年まではるか遠くにあった土地、なん

の影響もおよぼしてこなかった土地により、変化を余儀なくされたのだ。絶え間ない交流によって衝突と混乱が引き起こされる事態は、過去五〇〇年のあいだにあたりまえのことになった。エキゾチックな植物が並ぶわたしの庭も、ささやかな一例だ。それにしても、これらのトマトはどのようにしてウクライナにたどり着いたのだろうか。本書は、わたしがはじめてこの疑問を抱いてから、答えを見つけようとして、長年力を尽くした成果とも言えるのだ。